

川を中心とした『まちづくり』紫川マイタウン・マイリバー整備事業
City planning by Water front
My Town My River Murasakigawa

伊 藤 東 一 *
By Toichi Ito

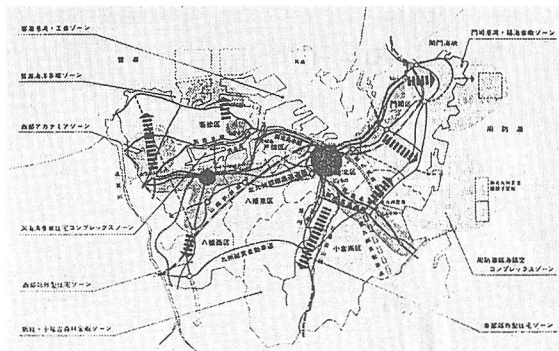
はじめに

九州の玄関口である北九州市は、昭和38年に隣接する5つの都市、門司・小倉・若松・八幡・戸畑が、例のない対等の合併によって誕生した都市です。

昔は京浜・中京・阪神と共に4大工業地帯と呼ばれ、鉄鋼業を中心とした素材産業が隆盛し、日本の高度成長をになっていました。

その後、わが国の基幹産業が素材型偏重の『重厚長大』から、3次産業やエレクトロニクスを中心とする『ソフト』へ転換されたため、北九州の相対的な位置も低下してしまいました。

このような時代の変化に対応するため、21世紀を目指した新しいまちづくりの指針として、『北九州市ルネッサンス構想』が昭和63年に策定されました。



まちづくりの方向

キーワード プロジェクト構想

* 北九州市建設局紫川周辺開発室 主幹

(〒803 北九州市小倉北区城内1番1号)

その中で、『水辺と緑とふれあいの国際テクノロジー都市へ』を基調テーマとして、『まちづくり』を進めていくことが提案されました。

『まちづくり』の目玉として、都心・副都心整備構想が設定されています。

これは、過去の多核都市論への反省から生まれたもので、旧市に、同じような行政サービスを提供するのではなく、各々の地域特色を生かすものです。

小倉を都心、黒崎を副都心とし、この2つの核を中心として『まちづくり』を進めるものです。

マイタウン・マイリバー整備事業

ご承知のように小倉の街は、旧小笠原藩の城下町として栄えてきました。

今では、北九州市のみならず、200万都市圏の中核として、人・物・金が集まる都市へと発展しています。

ところが、小倉の市街地の骨格は昔の城下町とほとんど変わっていません。



小倉藩士屋敷絵図(1850年頃)

道路は狭く、また中心部を流れる紫川によって東西に分断されているため、都心としてふさわしい街にするためには、大手術が必要です。

そこで、我々が取り組んだのが、川を邪魔者にするのではなく、川を中心とした『まちづくり』、マイタウン・マイリバー整備事業です。

この事業は治水対策を基本とし、河川改修のみならず、同時に道路・橋梁・公園の都市基盤整備を行い、併せて周辺市街地の開発と一体に整備することにより、水辺を生かした『安全で快適なまちづくり』を行なうもので、昭和62年建設省で制定された新たな事業手法です。

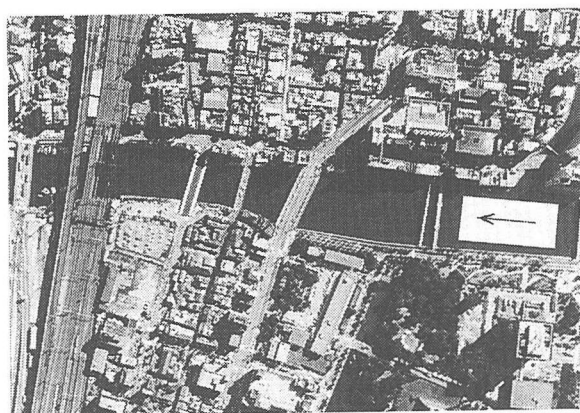
川の持つオープンスペースを、単に川だけのものとせず、周辺の市街地や公園、もちろん道路や橋も含めた総合空間として一体的にとらえた『まちづくり』に生かしていくこの手法こそ、本市再生のために掲げている『北九州市ルネッサンス構想』そのものです。

あたかも、本市のために発足した制度といっても過言ではありません。

紫川は

市境の福智山系を源とする延長約22km、流域約100km²の、市内最大の二級河川です。

この紫川は、河口付近の川幅が狭いことが特徴の一つです。



左側（下流）から4番目の橋付近が上流より約30m程狭くなっている

これは旧城下町の成り立ちから、無理もないことです。紫川は外堀で防塁の役目をはたすものであり、橋は費用や工事の手間を考えると、できるだけ短いものとの発想があったようです。

また、橋梁の脚が多く流通疎外となっていて、一昨年八月の鹿児島大水害のような雨が降れば、市街地で7800戸程度が浸水被害を受けると予測されています。

そのため、河川の整備が緊急課題であり、中小河川改修事業が福岡県で昭和44年度により施行されていました。

昭和62年度に、河口より貴船橋までが都市小河川改修事業区間の指定を受け、施行主体が北九州市となり、更に、マイタウン・マイリバー整備事業に採択されたことで、改修の進捗が大幅に図られることになりました。

紫川マイタウン・マイリバー整備構想の策定

まち全体が、川を中心に美しい調和を保ち、川に開かれたまちは、居住する人々にやすらぎと潤いを与えるだけでなく、訪れる人々にとっても、好ましい印象を与え記憶に残るのではないのでしょうか。

まず、専門家・行政機関・市民代表による委員会が構想を纏めるとともに、広く市民からもアイデアを募集し、素案を作成しました。

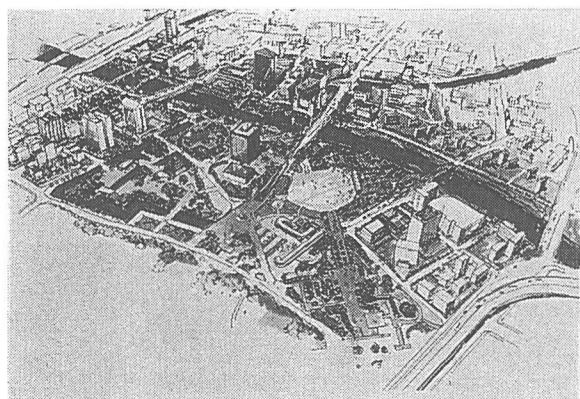
昭和63年には、マイタウン・マイリバー整備河川の第一号として、東京の隅田川、名古屋の堀川とともに指定を受けました。

そこで、この素案を基に整備計画を作成し、平成2年度には、建設省四局（都市・河川・道路・住宅）の認定を受け、事業が本格的にスタートしました。

紫川を中心に、JR鹿児島本線から国道三号貴船橋まで約2km、約170haの区域の整備です。膨大な事業となるため、当面の事業区域を、下流部より1・1km区間とし、15年間で完成させる予定です。

事業費は、道路などのインフラ整備と区役所移転などの公共施設整備が約940億円、民間による市

街地整備が約2670億円、合計約3610億円と莫大なものとなっています。



構想イメージ図

整備の内容

当然のことながら、治水対策が第一で、降水確率100年を採用し水害の心配がない河川断面の確保があげられます。

この紫川は、都市部にありながら豊かな自然に恵まれており、また官民あげての環境問題への取組みから水質も向上し、『アユ』や『シロウオ』がそ上し、市民の憩いの場となっています。

このため、安全で、見て美しい風景の川ではなくて、水辺において、水に触れ、水を楽しめるような、親しみのある水辺空間づくりが必要です。

河川については、護岸の勾配を緩くし過去のコンクリート辺倒から自然石を使用し、さらには空積みとして魚巣機能を持たせる他、生態系にも配慮したものとしています。

また、下流部には珍しい滝、さらには感潮河川なので、潮の干満を感じさせる入江（洲浜）の建設を進めています。

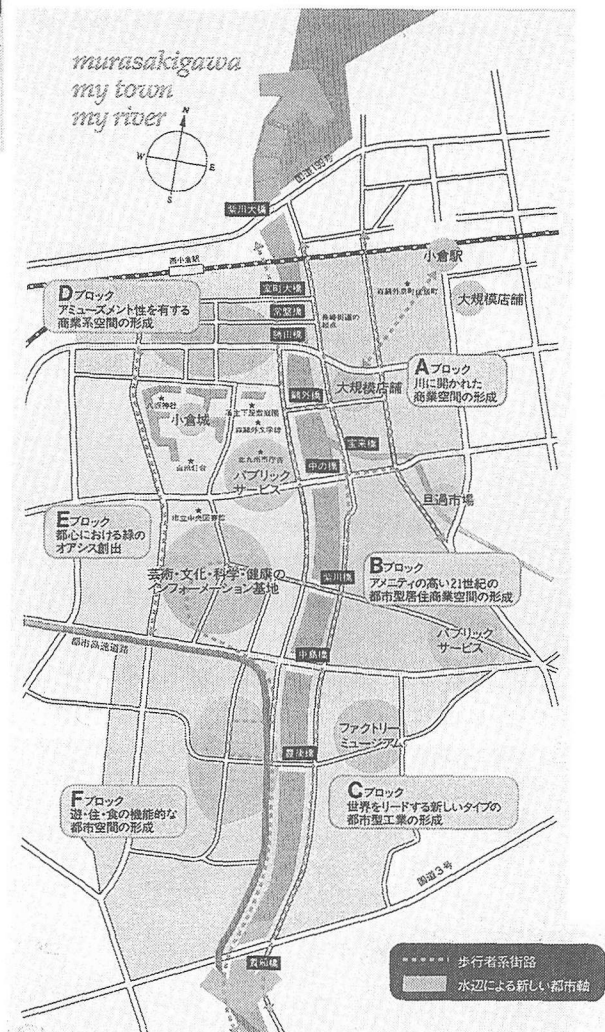
道路・橋梁についても景観を重視するのはもちろん、人々が『佇み』、『語らえる』場となるように、歩道はできるだけ広い幅員がとれるようにしています。

橋梁は、河川改修に伴う6橋の改築と、新たな道路

整備による4橋の新設、合計10橋の整備を計画しています。

ここでも、自然を基本テーマとしています。

下流から、海（紫川大橋）、火（室町大橋）、木（常盤橋）、石（勝山橋）、水鳥（鷗外橋）、月（宝来橋）、太陽（中の橋）、鉄（紫川橋）、風（中島橋）、音（豊後橋）と、各々の橋に愛称を付け、それに沿った構造やデザインとなるよう工夫しております。



マイタウン・マイリバー区域図

紫川左岸に隣接する勝山公園は、本市のセントラルパークとして位置付けられていて、小倉城を中心

とした歴史ゾーン、図書館周辺の文化・休養エリアは市民に親しまれ、愛されてきています。

今回、紫川と一体的に整備することにより、水辺を生かした公園としてより大きな空間が川と共用できて、市民にも喜んでもらえるものと考えています。また、市民要望の強い芝生広場（太陽の広場）や夜でも散策できる明るい散歩道（光の道）、さらには、小倉城の周辺に、伝統文化を学び体験できる場として和風建築物の建設を予定しています。

この事業の目的の大きな柱である『まちづくり』については、地域の持つ歴史性や商業集積、住宅立地等の街区特性に基づいて整備区域をAからFの6つに分け、各ブロックの回遊性を高め、紫川を軸とした『賑わい』のある『楽しく』人々の集まる『まち』となるように計画しています。

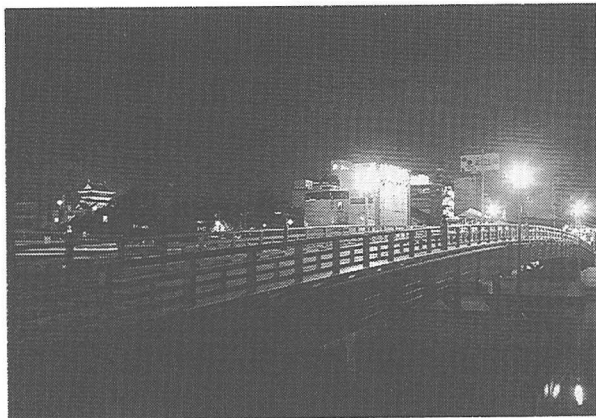
事業手法は、民間活力の導入を柱とし、各種補助事業や融資制度の活用によって、良好な市街地の形成が図られていくものと確信しております。

変化してきた『まち』

建設省をはじめ関係機関の理解・協力のもとに、事業は着々と進んでおります。

特に、河川・道路・橋梁の公共部門の進捗が著しく平成6年度末見込みで、約59%程達成しました。

中でも橋梁が最も進んでいて、既に海、火、木、太陽、風の5橋の供用を開始し、石の橋の工事を進めています。



木の橋（常盤橋）日本最大級の木橋

さらに、平成6年度より鉄、水鳥の橋の設計に着手しており、姿を現すのも時間の問題だと思います。

河川も一部ではありますが、低水護岸が姿を見せています。難渋していた狭少部分の移転交渉も、ようやく解決し、念願の拡幅工事に着手できました。雄大な景色が見られるのも間近です。

道路も都市計画道路浅野町・愛宕線が完成し、これは都市高速道路と直結しているため、小倉都心部の通過交通処理に大きく寄与しています。

さらには、小文字通りの拡幅と併せて、都心部の一方通行の解除をもたせ、市民から便利になったと喜ばれています。

また、平成8年度には都市計画道路紫川東線の中島工区が完成予定であり、馬借・中島地区の市街地開発を支援する起爆剤になると、大きな期待が寄せられています。

が、残念なことにバブルがはじけた影響を受けて、民間の投資意欲が衰退しており、市街地開発については当初予定していた程には成果があがっていません。

行政のバックアップやフォローによって、今後大きく展開していくことを期待しています。

おわりに

紫川マイタウン・マイリバー整備事業に対して、市民がどのように受けとめているのか、アンケート調査をおこないました。

結果は、市民の間にも『市民の川や橋』として注目され、理解されているばかりでなく、次々に姿を現した橋により、都市景観に対する期待が非常に大きいことがわかりました。

今後も、これらの施設が真に市民の『宝物』となるように、職員一同力を合わせ、さらに努力して行きたいと思っています。